

幼児の向社会的行動と役割取得能力

水 島 育 子

問題と目的

人間の社会的関係は、乳児期から幼児期にかけて二者関係からそれ以上の関係に広がりを見せる。Havighurstの発達課題にあるように、幼児期では同年齢の子供との仲間関係を築くことが重要になり、子供は友達との関係の中で、自己の欲求のみを優先させるのではなく、他者の視点に立って思考したり、他者のためになる行動（向社会的行動）したりすることを学習していく。これらを通して子供は持続的な仲間関係を形成していくことがDemon (1983)によって述べられているが、向社会的行動と役割取得能力の関係を研究することは、幼児期の子供の発達において意味深いことである。

向社会的行動の定義は、研究者によって若干異なっているが、他者や他集団に対する何らかの援助行動である点は共通している。Eisenberg (1977)によれば、向社会的行動は、最初罰の回避のような動機で行われるが、次第に他者の立場を考え、他者に利益をもたらすことそのものを動機とするようになる。向社会的行動は段階的に発達していき、その発達に重要な役割を果たすものが、他者の視点に立って思考・判断する役割取得能力である。本研究では向社会的行動が段階的に発達し、発達の途上にある行動すべてを向社会的行動ととらえるという前提に立って研究をすすめる。また役割取得能力は、Piagetが幼児の認知的特徴として挙げた自己中心性・脱中心化の概念を、単に個人内の文脈のみではなく、対人的・社会的文脈にも取り入れ (Feffer, 1959; Selman, 1974)、自己と他者の視点を分化させ、他者の物理的・感情的・認知的状態を自己との関係性の中で統合的に推測・判断し、段階的に発達する能力ととらえる。

また本研究では、向社会的行動が役割取得能力の発達とともに段階的に変化していき、その発達に行為者の能動性を重視する認知発達理論に立って研究をすすめることとする。

Underwood & Moore (1982)は、他者の視点を獲得することによって、他者の考えや動機に気付くことが可能になり、他者の要求に対する認知が高まり、それが自己の欲求を抑え、自己にコストが生じても他者の要求に応えようとする行動の先行因になる、と向社会的行動

と役割取得能力の正の関係を論じている。また Krebs & Russell (1981)は、他者の視点を獲得することで、他者の困難な状態の認知が可能になり、それによって、個人の道徳性が喚起され、向社会的行動をとるように動機付けられると述べている。向社会的行動を取るとき、行為を行う側と受ける側の立場は異なっており、そのとき他者の立場に立って他者の内的外的状態を判断出来なければ、他者に対して援助しようという動機が起りにくいと考えられる。このように理論的には向社会的行動と役割取得能力には正の関係があることが予想される。また、Battistich, Solomon, Watson, Solomon & Schaps (1989)の向社会的行動の訓練研究でも役割取得能力との正の関係が示されている。しかし、両者の相関研究での結果は一貫していない。この原因としては、向社会的行動と役割取得能力をどうとらえるか、という問題と、測定の問題が考えられている (Eisenberg, 1986; Stewart & Marvin, 1984)。

向社会的行動に関係のある役割取得能力としては、他者の視点に立って他者の思考・動機を推測出来る認知的役割取得能力と、他者の感情を推測出来る感情的役割取得能力であると言われているが (Eisenberg, 1986 その他)、向社会的行動の関係は一貫していない。まず認知的役割取得能力についてであるが、Peterson (1983)や、その他が用いている認知的役割取得能力の課題は、他者の視点に立った思考が出来るかどうかを測定しているというよりは、一般的知識を測定していると考えられる。そのような課題を用いた場合、向社会的行動とは無関係という結果が出ている。一方、Krebs & Sturupp (1982)での課題は、自己と他者を分化させ、他者の視点に立って思考することが必要とされる課題であり、向社会的行動と正の関係が得られている。また感情的役割取得能力については、自己の感情の投影ではなく、他者の個人的特性を考慮に入れて他者の感情を推測する能力が必要と考えられる。このように、向社会的行動に必要な役割取得能力は、①単に他者と自己の視点の違いに気付くのみでなく、自己と他者の視点を分化させ他者の視点に立った思考をする能力と②自己の感情の投影ではなく、他者の個人的特性を考慮に入れて感情を推測する能力と考えられる。研究に際してはそれを適切に測定する

課題を用いることが必要である。

また向社会的行動の測定方法としては、大きく分けて実験室場面のもと、日常行動のものがあり、両者は向社会的行動の別の側面と考えられている (Iannotti, 1985)。従って本研究では両者を取りあげ、役割取得能力との関係を見ることにする。また向社会的行動の中でも、他者の視点をとる事が出来るかどうかに関係していると考えられる行動を選択することによって、両者の関係が、明確になると考える。さらに向社会的行動に関係が深いと考えられる行動特性についてもあわせて考察し、幼児の向社会的行動と役割取得能力の関係を明確にすることを目的とする。仮説は、実験室実験による向社会的行動、日常での向社会的行動ともに、役割取得能力と正の関係がある、である。

研究 1

方法 被験者は名古屋市内の私立保育園児77名。平均年齢66.87か月。認知的役割取得能力の課題は、Flavell (1968) のものを参考に、筆者が被験者の年齢と研究目的にふさわしいように改変したものをを用いた。この課題では被験者の自他の視点の分化を、他者の視点と自己の視点が未分化な段階から、自他の視点の違いに気付いているが、他者の視点に自己の視点が混在する段階、自他の視点が分化し他者の視点に立って思考出来る段階に分類する。感情役割取得能力の課題は、朝生 (1987) のものを参考にし、自己とは違う特性をもつ他者の感情を推測出来るかどうかを測定する。向社会的行動の尺度としては、他者の立場に立つことが出来るかどうか、向社会的行動の生起に強く関係すると考えられる分配行動を尺度とした。具体的にはゲーム券の分配数と分配理由を採用した。測定はすべて個別に行った。

結果 被験者の年齢・性別・言語能力を統制して、向社会的行動と役割取得能力の偏相関分析を行ったところ、分配理由と認知的役割取得能力に正の有意な相関がみられた。一方、感情的役割取得能力は、分配数・理由とも関係が見られなかった。男女別に相関をみたところ、女子についてのみ分配理由と認知的役割取得能力に正の相関が見られた。

考察 分配理由と認知的役割取得能力に正の相関が見られたことは、他者の視点に立った思考が出来ることによって、他者の困難な状態に対して理解を促進したり、他者に対し敏感に反応しやすくなり、それが他者に対して援助を行おうという動機付けに関係したと考えられた。一方、感情的役割取得能力は、分配数・理由とも関係が見られなかった。感情のように、他者との関係の影

響を受け易いもの場合、単に自己とは特性の異なる他者の感情を理解できるかどうかだけではなく、その状況を自己がどのようにとらえているかが、大きく関係するのかもしれない。また男子に比べて女子の方が、向社会的行動を行うかどうかにか他者の視点に立って思考出来るかどうかが強くと関係しているといえる。

研究 2

方法 被験者は研究 1 と同じ。役割取得能力についても研究 1 のものを用いる。向社会的行動については、Strayer (1981) の幼児の向社会的行動の分類項目を参考に、保育園での日常行動を担当の保育者に評定してもらった。加えて向社会的行動に関係の深い行動特性についてもあわせて考察する。

結果 年齢・性別・言語能力で統制し、役割取得能力と向社会的性及びその関連する行動特性の相関をみたところ、感情的役割取得能力と向社会的性、自己統制力に負の関係が見られた。認知的役割取得能力との相関は見られなかった。

考察 結果から、向社会的行動が生起するには、自己と特性の異なる他者の感情を理解出来ることだけでなく、他者の感情が理解出来、それをどのようにとらえているかが関係しているのではなかろうか。また感情的役割取得と自己統制力も負の関係がみられたが、向社会的行動を行うには自己の欲求を抑えることが出来るかどうかに関係することが考えられる。また日常場面では、向社会的行動を行うか否かが、他者との関係性の影響を強く受けると考えられる。従って日常行動での向社会的行動と役割取得能力の関係を調べるためには、具体的な対人場面での役割取得能力との関係を見る必要がある。また、女子では向社会的行動と自己統制力に正の相関関係が見られたが、男子では見られなかった。これは男子と女子に対する社会化の違いが反映したものと考えられる。

総合的考察と反省 研究 1 と研究 2 の結果から、向社会的行動と役割取得能力の関係は場面規定的であり、一貫した結果は得られなかった。両者は多面的概念であると考えられるので、本研究での役割取得能力に加えて、対人的文脈での認知的・感情的役割取得能力の課題も用いて、実験室場面や日常場面での向社会的行動との関係を調べ、結果を統合的に解釈することが必要である。また、男女で向社会的行動と役割取得能力との関係、向社会的行動と関連のある行動特性が異なっているので、男女別に検討する必要があるだろう。